市読書感想文コンクール 市長賞受賞作品紹介

毎年開催している市読書感想文コンクールは、今回で52回目を迎えました。市内の小・中・高等学校から寄せられた53編のうち、本号では市長賞を受賞した作品を紹介します。

★小学校中学年の部

海を大切にしたい

中西小学校4年　桐木　かんなさん

八月六日、はなゆめプロジェクトに参加しました。高校生たちが海の清掃活動で集めた材料をリサイクルして、それをビンに入れてかざりました。ビンのはへんはきれいで、かわいい作品ができた時はうれしくて、どこにかざろうかなと、わくわくしながら持って帰りました。

作る前に、高校生からクイズがありました。一番びっくりしたのは、海にどのぐらいのごみがあるかという問題でした。思っていたよりもごみの量が多く、海のかんきょうのことをもっと知りたいと思い、この本を見つけました。「クジラのおなかからプラスチック」、本の題名を見て、とてもおどろきました。

一番印しょうに残ったのは、ごみで苦しんでいる生き物たちです。クジラや魚たちがごみを食べて苦しんで死んでしまったり、おなかから大量のごみが出てきたりしているそうです。また、あみにもつれているカメや、ビニールにからまった鳥の写真もありました。動けなくなったカメや鳥は、死んでしまうそうです。本当にかわいそうで、読んでいてつらくなりました。

その中でも、プラスチックごみは、自然にはとけてなくならないそうです。でも、プラスチックは、ビニールぶくろや、ペットボトル、食品トレイ、洋服、台所用スポンジなど、生活の中でたくさん使われていてべんりです。そのプラスチックがごみになった時は、べんりな物からこわい物に変わることが分かりました。

本を読んでみて、初めて知ったこともあります。一つ目は、海が元気だと海そうが育って、さんそや栄養分ができて、それが海の生き物の命を守ることにつながっているということです。二つ目は、海が元気だと、雨がふって、山の木も育って、さんそや栄養ができて、海の外の人間や動物などの生き物の命も守られているということです。それまでは、海の生き物たちがかわいそうだなぁとか、わたしたちが魚を食べられなくなると困るなぁと思っていました。でも、それだけではなく、海が元気だと地球の生き物みんなが生きていけること、海がすごく大切だということが分かりました。

本を読み終わって、はなゆめプロジェクトですてきなリサイクル作品を作ることができてうれしかったけれど、本当はごみがない方がいいんだろうなとモヤモヤしました。

どうしたら、海や生き物、地球が苦しまないようになるのか、できることを調べてみました。例えば、川や海にごみを流さない。ごみの分別をきちんとして、リサイクルすることでプラスチックの量をへらす。プラスチックせい品をできるだけ使わないように、エコバックを使う。紙パックのジュースを選ぶ。ストローを使わないようにするなどです。地いきの清掃活動に参加してみることも自分にできそうだと思います。できることを少しでもやって、海を大切にしていきたいです。

※読んだ本
「クジラのおなかからプラスチック」
保坂　直紀（旬報社）

★中学校の部

幸福に傷つけられる

益田中学校3年　桜井　トキさん

「弱虫は、幸福をさえおそれるものです。綿で怪我をするんです。幸福にさえ傷つけられる事もあるんです。」

この言葉に、私ははっとさせられた。自分も同じだ。幸福にさえ傷つけられ、幸福をおそれる自分も、「弱虫」なのだと。そして、儚くて崩れやすい幸福というものに、自分がどう向き合っていくかが大切だということを、この「人間失格」から学んだ。

主人公の葉蔵は、常に道化を演じ、自分の本心を出さない人物である。そうすることで、周囲の人から求められ

る「自分」を演じてきたのだ。自分の本心を出さずに、求められている姿を演じることは、とても苦しいことだと思う。

だけど、そんな葉蔵と私はなんだか似ているような気がした。本心を隠し、求められる姿を演じることは、別に不思議なことではなく、ごく普通のことかもしれない。私自身も葉蔵と同じようなことをしていることに気が付いたのだ。学校はもちろん、家でも、常に素の自分でいることは難しい。家では、真面目で面倒見のよい「姉」の役割を、学校では、明るく意欲的な生徒であり続けることを、求められてきたように私は感じていた。そして、求められる姿と、本当の自分の違いに、ずっと悩んできた。

心配をかけたくない。必要とされる自分でありたい。頼りにされたい。求められたい。愛されたい。様々な思惑があるから、人は演じるし、時には道化にもなるのだと思う。自分を偽ることは、生きていくためには必要なことなのかもしれない。

「それは人間に対する最後の求愛でした。」葉蔵は人間を極度に恐れながらも、人間にすがりたい思いから道化を演じていた。その理由の一つには、父の存在があった。厳しい父からの期待に応えたい、応えなければならない、しかし、きょうだいたちのようには父と上手く関係を築けないことに苦しさを感じていた。そして、父を恐れるあまり、幼い葉蔵は心を痛め、その後の人生を歪めていったのである。葉蔵は、酒や女、薬物におぼれていった。どれも最初の頃は幸福な時間をもたらし、心を満たしてくれた。しかし、長続きはしなかった。一度満たされた心は、満たされる前よりも脆くなっていたのだ。酒や薬物などで満たされたはずの心は、すぐに空っぽになり、葉蔵の苦悩は増し、ひどくおびえるようになっていく。

幸福なのに、幸福だからこそ恐ろしくなる気持ちはよくわかる。順風満帆だと思えるような時に、ふと「この幸福は一瞬のもので、すぐに壊れてしまうかもしれない。」と不安になってしまうことがある。もちろん幸福であることを望んでいる。それなのに、その幸福を思う存分喜べない自分がいるのだ。幸福な日々とそうでない日々の繰り返しが、人を不安にさせ、狂わせてしまうのではないだろうか。

私も、幸福ではないのに、なぜか安心してしまうことがある。もちろん出口のない暗いところをさまよっているみたいで、不安な気持ちにはなる。けれど、幸せはいつまでも続かないだろう、この幸せを失ってしまうのではないかとおびえることはない。そのことに安心する自分がいるのだ。

幸福なときは、幸せを感じていても、頭の片隅で、この幸せがどのくらい続くのだろうかと気になって、純粋に喜べない自分がいる。幸福であることを心から喜べない自分に腹が立ってしまう。

物語の最後の、葉蔵の母の「あのひとのお父さんが悪いのですよ。」という言葉が印象的だ。葉蔵は、酒を得るために多額の借金をし、薬物中毒になり、入水自殺を試みるなど、自分で自分を傷つけ、周囲に迷惑をかける。しかし、それは葉蔵が悪いのではなく、幼い頃の葉蔵を苦しめ、狂わせるような家庭環境を与えた父が悪いという考えなのだ。この解釈に、私はその通りだと思った。もし葉蔵が温かい家庭環境で育っていたら、どんな人生を歩んでいただろうか。もし父の存在が葉蔵の心を支配していなければ、彼はこんなにも苦しい人生を送ることはなかったと思う。

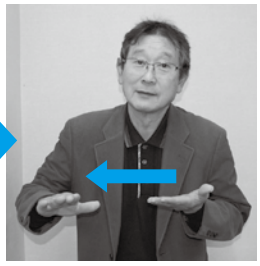
幼い頃の家庭環境は、その人の人格形成に大きく影響を与え、人生を左右すると思う。葉蔵は、父の存在におびえ、幸福に傷つけられ、人を恐れ、それでも人を愛そうとした。だが、上手く生きていくことができなかった。そんな彼は幸せだったとは思えない。けれども、彼は人間味にあふれた人だと、私は感じた。

生き方に正解はないことを、この作品を読んで知ることができた。幸せなとき、幸せでないとき、どのように考え、どのような生きていくのか。このことを、これからも考え続けていきたい。

※読んだ本「人間失格」
太宰　治（角川文庫）

「手話」をやってみよう！

【今月の手話】　きれい・美しい



手のひらを上向きにした左手に、右手の手のひらをあわせ、右手を右にすべらせる。

【問い合わせ先】
市障がい者福祉課　☎31-0251　FAX 31-8120